



ND BULLETIN

Vol. 202

issue

May 2019

[卒業生・在学生対談]

地域の課題と自分が つながる種を大切に

社会課題の見つけ方・とらえ方、

解決者としての役割について

チャリティーサンタ×二階堂ゼミ



特集 国際交流

本学の伝統行事

卒業証書・学位記授与式

入学宣誓式

file.02 地域の課題と自分がつながる種を大切に

これから地域社会を支える担い手になっていく私たち。

社会課題の見つけ方・とらえ方、解決者としての役割について伺いました。

フィールドワークを通して地域づくりについて考える

荒尾 私たちは昨年、ゼミの研究活動で過疎化が進む美咲町を訪りました。「棚田きんちゃい祭り」や「美咲芸術世界」などのお手伝いを通して、地元の方々や参加者のみなさんと交流させていただき、そこで得たことを地域再生という観点で考察することに取り組みました。

河津 事前に研究記録を読ませてもらいましたが、3人とも人口減少などについて書かれています。実際にやってみたかったのです。

藤澤 やはり若い人が少なくて、地域を

盛り上げていくには、大学生や若い人の参加が重要になると感じました。

細川 地域資源を活かしたイベントや活動の持続・発展と、その魅力を広く伝える情報発信がこれからの課題になると感じました。

河津 美咲町に限らず、地域社会の担い手が減っていくのは、日本中の中山間地域に共通する課題ですよね。今後、インフラや社会保障などの社会の課題がどんどん増え、ますますお金がかかる時代がやってきます。そうなると、人口が減少する中山間地域から予算が切り落とされ、地域文化の継承もできなくなってしまう。だから、これからは地域の人たちが、自分た

ちの力で地域を担っていく必要があると私は強く思っています。NPOの世界では、「私たちは空き缶を拾う権利がある」という言葉をよく使います。それは、社会の中で困りごとがあった時に、行政に解決してもらうのではなく、自分たちの力でより良い社会を作ることができるという意味です。

地域の課題とつながる種を自分の中に見つけていく

荒尾 河津さんが携わっているNPOの活動について教えてください。

河津 NPO法人チャリティーサンタは、サンタクロースというわかりやすい題材を用

卒業生
2008年 文学部現代社会学科 卒業
河津 泉（旧姓：渡邊）

2012年にNPO法人岡山NPOセンター入職。またNPO法人チャリティーサンタの理事兼岡山支部代表も務め、子どもの貧困を取り扱う「ルドルフ基金」の担当理事として活動中。

在学生

現代社会学科 4年
荒尾 真衣

【二階堂ゼミでの研究活動】
2018年、岡山県美咲町大井和地区で「グリーンツーリズムを活用した地域再生の可能性」をテーマに、フィールドワークによる研究活動を実施。

現代社会学科 4年
藤澤 晶子

現代社会学科 4年
細川 志奈

【チャリティーサンタの活動】
クリスマスイブの夜、申し込みのあった家庭をボランティアサンタが訪ね、寄付金を募る活動を2009年より開始。寄付金は世界中の困難な状況にある子ども達のために使い、生活困窮家庭の思い出支援、災害後の子ども達の支援、途上国の子ども達の教育支援などに充て、多くの人に笑顔を届ける活動を行っている。



いて、世界中の子どもたちに働きかけるチャリティー活動を行っています。社会参加のハードルを下げ、誰もが地域社会へ関わるきっかけづくりを行っています。

藤澤 子どもの貧困問題にも取り組まれているとお聞きしました。

河津 数年前、クリスマスを楽しいと感じている一方で、どこかでそれを苦しいと思っている人たちがいることに気づいたんです。今、日本の子どもの7人に1人が貧困状態にあり、私たちがシングルマザー100人に調査を実施したところ、3人に1人がクリスマスなんて来ないでほしいと思っていたことがわかりました。そこで、通常の訪問によるチャリティー活動で得た寄付金で、経済的に厳しい家庭に無料で訪問させていただき、プレゼントを渡す「ルドルフ基金」という仕組みを作りました。



子どもを笑顔にしたいと語る河津さん。

細川 7人に1人と聞いて驚きました。
河津 子どもの貧困だから福祉の話だと言ってしまえば、それまでです。でも、もしかしたら自分の子どもの同級生かもしれない。自分の隣で起きていることかもしれない。自分たちが住みたいのはどういう地域かと考えた時に、困っている家庭が声を上げやすく、多くの人が社会参加しやすいところがいいと思いました。このような考えを出発点として、そこから行政や他の支援団体をつなぐ仕組みづくりをいま進めているところです。

細川 みんなが身近に社会参加できるようにハードルを下げていくには、自分自身どのような活動ができるだろうかと考えながら聞いていました。

河津 そう!大切なのは、いかに自分の身近なことに結びつけて考えるかなんですね。みなさんは卒論作成に向けた研究



「誰もが地域の担い手です。自分が何とつながっているのか、想像力をどれだけ発揮できるかが、住みたい社会、持続可能な社会を作っていく鍵です」と河津さん。知識が多いほど想像力は広がり、多角的に考えられる。清心でのリベラル・アーツという横断的学びには意味があったと語ってくれました。

があるのかを調べたいと思っています。



先輩のアドバイスを真剣に聞く学生たち。

河津 教育現場に切り込んでいくよりも、最初に自分の中で感じた課題がきっかけだったんですね。その目線はすごく大事だと思います。社会の課題は、知られなければ存在しないのと同じで、認知されなければ誰もそれを治癒することができません。まずは課題を知ること。さらに解決方法も知って発信する人になってくれることを期待しています。どの職業についても「何を選択するか」ということを考えることが、社会をよくしていきます。しかし、それらの選択をするのには社会で必要とされることを考える「想像力」と、実現するための「具体的な根拠」が必要です。私はリベラル・アーツの強みはそこにあると考えています。大きく視野を広げ、様々な視点で知識を持ち、そこに根拠を持つことができる。この大学でリベラル・アーツの教育をうけたことが私の強みになっていると思います。自分たちの「住みたいまち」をつくるために、大学時代に様々な経験を通して担い手となる力を身につけてもらえたならと願っています。

03

March

Event

大学院第23回学位記授与式及び学部第67回卒業証書・学位記授与式を挙行

2019年3月14日(木)10時から、本学記念館にて大学院第23回学位記授与式及び学部第67回卒業証書・学位記授与式が挙行され、修士の学位が8名に授与されるとともに、文部科学省230名及び人間生活学部321名に学士の学位が授与されました。

卒業生たちは、完成したアカデミック・ドレスをまとい、クラスフラワーを胸につけ、ピアノ伴奏に合わせてグース・ステップで厳かに入場しました。

原田豊己学長から卒業生一人ひとりに卒業証書・学位記が「おめでとうございます」と手渡され、卒業生たちは「ありがとうございます」と応え、学士になった証として、キャップの房の位置を自分の左前から右前に移動させました。

原田学長は式辞の中で「生命と平和の尊さを選び取る生き方、隣り人も神によって創造された、かけがえのないものとの認識、自分の能力・才能を無償で少しでも隣り人に用いる勇気などを持つ「新しい人」は、理想

主義と言われるかもしれません。それでも私たちは「新しい人」になるように努めなければならないのです。これこそが、ノートルダム清心女子大学が掲げる「真の自由人」が持つ心根だからです」とメッセージを贈りました。



ノートルダムデー

3月4日(月)にノートルダムデーが行われました。本学では、この日からフッド授与式を経て、卒業証書・学位記授与式にいたるまでの期間を「大学で過ごした4年間を振り返る時期」と位置づけています。

津田葵理事長と原田学長からは、4年生へ本学で学んだ意味と力強いメッセージが贈られました。さらに、4年生が中心となって運営される「聖書の集い」では、学生たちが聖書の言葉を味わい、学生生活を振り返りました。これまでに与えられたすべての恵みに感謝し、この大学で学んだことをこれから的生活で活かしていくことができるよう内省しました。4年生一人ひとりが4年間の大学生活を静かに振り返り、感謝の祈りを捧げました。



大学院第23回・学部第67回 フッド授与式

3月8日(金)に、大学院第23回・学部第67回フッド授与式が、白浜満司教(カトリック広島司教区)と原田豊己学長神父による共同司式によって執り行われました。

フッド授与式は、学生が社会に出る決意を固めるとともに、神から祝福を受ける式で、フッド授与式とミサ(感謝の祭儀)の2部構成で行われます。5月に授与されたキャップとガウンで入場した修士・学士候補生は祈りを捧げ、フッドを着用することでアカデミック・ドレスを完成させました。

04

April

Event

入学宣誓式を挙行

4月1日(月)午前10時より、本学記念館にて入学宣誓式が挙行されました。文部科学省232名、人間生活学部294名、大学院生3名の計529名の新入生を迎えるました。

式典では、原田学長の祈り、聖歌に続き、新入生宣誓が行われ、新入生たちは学生生活への決意を新たにしました。

津田葵理事長は挨拶の中で、新入生に「大学生になった今、何を次のゴールとしていますか、将来の自分をどのように描いていますか」と問い合わせ、聖ジョニー・ビリアートの教育理念を、「一人ひとりの命は特別で、これまでこれからも他の人と交換できない唯一のかけがえのない存在。独自性多様性を尊重しながら相手に寄り添っていくことが大切」と伝えました。

原田学長の式辞では、大学の歴史や本学のリベラル・アーツ教育に触れ、初代学長シスター・メリー・コスカの言葉を引用し「本学のすばらしさはここに集う学生の皆さんにある。皆さんが本学で学べてよかったという思いがすべてに優先する」と述べました。



歓迎の辞では、在学生代表栗元つかさん(児童学科4年)が「幅広い人との出会いがかけがえのない財産。これからの生活が実り多きものになりますように」と後輩へ温かいメッセージを送り、新入生挨拶では、新入生代表の寺岡久美子さん(英語英文学科1年)が「グローバル化が進む現代社会の中、周囲の意見に流されず、しっかりと自分の意志を貫いていくように努力したい」と抱負を語りました。



入学感謝ミサ

4月9日(火)9時から、本学記念館にて原田学長神父の司式により入学感謝ミサを行いました。入学感謝ミサは、これから始まる大学生活における新入生の安全と無事を祈り、入学への感謝を込めて行われるミサです。

福音朗誦「ルカによる福音書10章25節-37節」の後、原田学長神父は説教の中で「これから卒業までのミサで、一緒に心を合わせてお祈りしていきたい」と語り、カトリックにおける「愛」の意味に触れつつ、「4年間一緒に学生生活を送っていく中で、ぜひ人のことを思いやり、神に愛されていることを心に留めて生活をしてください」というメッセージが伝えられました。



新入生オリエンテーション

4月2日(火)から4月9日(火)の間、新入生オリエンテーションが実施されました。

新入生は、学生生活ガイダンス、学科オリエンテーション、学生生活支援講演会などに出席し、大学生活を送る上での基本を学んだ後、具体的な科目履修について指導をうけます。他にも先輩たちの案内でキャンパス内を巡り、教室の場所を確認したり、クラブ紹介で先輩たちから熱い勧誘をうけたりと、授業開始までの数日間をかけて大学生活を始める準備をしました。

さらに、1979年から続く蒜山セミナーハウス等での合宿オリエンテーションに参加し、同じ学科の先輩たちが企画したレクリエーションを楽しみながら仲間をつくり、友情を深めました。

05

May

Event

第68回キャップ・アンド・ガウン授与式を挙行

5月11日(土)9時30分から、本学記念館において第68回キャップ・アンド・ガウン授与式が挙行され、文学部255名、人間生活学部329名、計584名の学士候補生が誕生しました。

新緑の空気が清々しい朝、キャップとガウンを身にまとった学士候補生たちが一歩一歩グース・ステップを踏み、記念館へと厳かに入場し、後輩や保護者の方々に見守られる中、声高らかに祈りと宣誓を唱えました。

学長式辞では、原田学長が、聖書の言葉「偽りを捨て、それぞれ隣人に対して真実を語りなさい」(エフェソの信徒への手紙4章25節)を贈りました。「情報の発信が簡単な現代社会にあって、偽りや創作された情報があたかも真実のように、まことしやかに流されています。その目的は、自分を満足させ他人を貶め、金銭や権力や偽りの名声を手に入れることにあると思われます。いま、私たちが行うべきは、宣誓の言葉にもあるように、「英知を重んじ、善を尊び、真理を愛する」ことによって、自己を確立することだと思います。なぜなら、自己を確立した者は、何が真実で何が間違っているかを見極める心と目を持つからです。聖書の言葉にあるように、私たちは、その心と目を自己満足のために使うのではなく、物事に流されやすい者、自己を確立できない者、強くない者たち、すなわち隣人のためにこそ使用しなければなりません」と述べ、最後に「授与されたキャップとガウンを誇りに、卒業までの日々を誠実に過ごしてください」と学士候補生へメッセージを贈りました。



治部眞里先生

退職を迎えて

私は1986年に34歳で本学に数学、情報処理学の教員として赴任し、33年間にわたり情報理学研究所、情報センターに勤めさせていただきました。歴史ある建物の3階の一室を研究室として与えられ、中庭の景色が季節の変化を楽しませてくれました。無事に勤め終え、今日を迎えたのは、教職員の方々や学生の皆さんのお蔭だと感謝申し上げます。

本学に赴任するきっかけは、私より一足先に勤めていた大学時代からの同級生保江邦夫君から「理科系の人を探している」という連絡をもらったことでした。応募後、当時の渡辺和子学長と江草安彦学長補佐の面接を受けるために、緊張しながらドイツより帰国したことを懐かしく思い出しました。

私は、赴任するまで理科系人間で数値や論理だけ

人間生活学部教授 水野 博

の世界に住んでいました。本学に着任後は、キャップ・アンド・ガウン授与式、フッド授与式、卒業式等の伝統ある行事にふれ、とても新鮮な感動を受けました。また、確固たる教育理念の基に人間形成の教育が実践されていることを知り、私自身も多くの事を学び、少しだけですが幅広くなったのではないかと思っています。

本学が、本学らしい教育理念と校風で、また大学らしい大学として、今後とも一層発展されることを祈念いたします。



学長補佐、人間生活学部長、教務部長、学務部長、資料編纂室長、情報機器教育等支援センター長、情報センター長を歴任。

感謝と奉仕の心を大切に

私は、この3月で、中学校入学から約55年間の清心学園生活を卒業となりました。今まで、いろいろとお世話になりました。心から感謝しています。

中学校入学当時は、校長先生をはじめ、外国人のシスターたちが多く、今の修道服と違い、黒の丈の長いワンピースに黒いベール、白のボンネットと、とても神秘的な装いでした。まるで霞でも食べているかのようでとても不思議に思いました。朝は、玄関に立ち、生徒を迎えるシスターの姿、授業中、日本語交じりの英語で話しかけてくださっていたシスター。学生生活の傍らには、いつもシスターたちが寄り添ってくださいました。

シスターたちはよく「清貧、従順、貞潔」とおっしゃっていました。また、「あなたたちは一人で生きているのではなく、生かされているのです。どんな時にも感謝を忘れてはいけません」「いつも笑顔で過ごしましょう」「きちんとご挨拶をいたしましょう」など、まずは人として、基本的な「しつけ」をしてくださいました。厳しい「しつけ」でしたが、これは「おしつけ」ではありませんでした。

「清心学園の建学の精神とは何か」と聞かれます。

地域連携センター事務次長 樋口 京子

思えばそれは、中学校の校歌にしっかりとあらわされていた「感謝と奉仕の心」だと思いました。中学校入学時に、流れる校歌を初めて聴いたとき、心が洗われるようでした。今でも時々、鼻歌交じりに口ずさみます。

あらゆる生きもの 海山のせて／天より賜る 大地
の上に／果てなき恵みに 包まれつつも／やすけく
たぢいる 我らを思え(1931年制定旧校歌)

清心学園で学べて本当によかった。学園入学時に、厳しくしつけをして下さったシスターたち、心優しい先生方や心通う皆様に出会えてよかった。清心学園で過ごした人生の大半は、他の学校では得ることのできないかけがえのない私の宝です。

財務部、入試広報部、大学院・学部事務室、学長事務室(室長)等を歴任。
大学アーカイブ運営委員会(2019年3月22日開催)の委員退任にあたり、本学の教育理念についてお話し
いただいた内容を学報用に短くまとめいただきました。



03

March

Event

「ささやかまるしぇ」に本学学生が参加

パン工房スピカは、本学から徒歩1分の場所にある発達障害の方への自立、就労支援を行う施設です。学内でも焼きたてパンを販売しており、多くの学生・教職員がパンを購入しています。いつもお世話になっているスピカのイベントに学生たちが協力しました。

地域の人々とつながる憩いの場に

3月15日(金)、16日(土)にパン工房スピカ主催の「ささやかまるしぇ」が開催され、本学人間生活学科で社会福祉士課程を履修している学生4名が協力しました。

15日(金)から開催された写真展では、学生2名が受付・案内等で協力し、16日(土)は2名の学生が、パンや果物、野菜、特別支援学校の生徒が作った小物を販売しました。肌寒い日にもかかわらず、おいしいと評判のパンはあっという間に売り切れました。参加した学生の一人は「地域の方々も来てください」「地域と福祉を繋げる」ということについて学びました」と語っています。



02

February

Event

「地域を学んでのこさずたべよう事業」

岡山県環境文化部循環型社会推進課から募集のあった「平成30年度地域を学んでのこさずたべよう事業」について、2018年4月に当事業の補助対象大学に選定され、5月に補助金交付決定されました。本学は食品栄養学科の学生が、2018年5月～2019年2月末までの期間、活動を行いました。

食の大切さと地域の魅力を再発見

「地域を学んでのこさずたべよう事業」は、岡山県における若い世代の食品ロス削減意識の醸成のため、大学生が、食品がつくられるまでの労力や食品が生まれてくる地域の土壤・気候・風土等をフィールドワークで研究し、若者の視点や発想を生かした小学生向けの教材を作成の上、小学校での出前講座等を行う活動です。

学生たちは調査対象地域について調べ、聞き取り調査を行うことで、地域の方々を通して食に対する新たな発見と学びを深め、その研究結果を踏まえて

小学校にて出前授業を行いました。2018年5月～9月に、倉敷市の天城・藤戸地区で調査を行い、11月8日(木)、9日(金)、2019年1月30日(水)に天城小学校出前授業を実施しました。



04

April

Event

地域連携・SDGs推進センターの設置について

地域連携・SDGs推進センター長 山下美紀

2019年4月に、「地域連携・SDGs推進センター」(NDSU Center for Regional Collaboration and SDGs Promotion)が設置されました。前身の「地域連携センター」(2014年設置)を拡充し、総合的な地域貢献活動と「持続可能な開発目標」(Sustainable Development Goals: SDGs)の達成、及び関連学術研究と人材育成に取り組んでまいります。

地域連携においては、岡山・中四国の諸団体(地方自治体、産業界、メディア、公益社団・財団法人、NPO法人等)との連携を引き続き発展させるとともに、京阪

神・関東圏・海外の諸団体、国際機関、国際協力NGO等との連携も、視野に入れてまいります。

SDGs推進においては、本学の母体ナミュール・ノートルダム修道女会の長年にわたる国際連合や開発途上国での活動、SDGs制定への尽力、及び世界中の系列大学・学校でのSDGs実践等をふまえた「SDGs理解」と、女子大学である本学の特徴をふまえたSDGsの達成を推進してまいります。

情報は今後、大学ホームページ内の本センターのページやブログ等で発信をしていきます。

04

April

Event

ノートルダムホール本館・東棟 春の見学ツアー「特別見学会」

本館及び東棟は、日本における昭和初期のモダニズム建築として貴重な存在であり、今もその姿のままで使われ続けている素晴らしい建築遺産であることから、2007(平成19)年に国の登録有形文化財に登録されました。また2018年にはDOCOMOMO Japanによる「日本におけるモダン・ムーブメントの建築216選」にも選定されています。

2019年4月27日(土)13時30分から、「ノートルダムホール本館・東棟 春の見学ツアー特別見学会」を開催しました。両校舎は、アントニン・レーモンド(チェコ共和国出身のアメリカ人)という建築家によって、1929(昭和4)年に建築され、本年竣工90周年を迎えます。校舎見学ツアーは、校舎竣工90周年及び大学創立70周年を記念して、昨年度の秋から始めました。日頃からご支援いただいている地域の皆様に感謝の気持ちをお届けするとともに、本学への理解を深めていただく機会として企画しました。

天候に恵まれた特別見学会当日は34名の方が参加してくださり、神父である原田豊己学長の聖堂解説、建築学専門の上田恭嗣特任教授の校舎解説に熱心

に耳を傾けていらっしゃいました。「近代建築に興味をもった」「歴史的価値を認識した」「建物のそれぞれの素晴らしさの説明を聞いてより理解できた」などの感想をいただき、好評なツアーとなりました。

春の見学ツアーは、3月下旬から6月上旬の土曜日に開催しました。次回は秋の見学ツアーを予定しています。詳細はホームページにてお知らせいたします。



INTERNATIONAL EXCHANGE

国際交流

- Seishin and the World -

留学 STUDY ABROAD EXPERIENCE 体験記

01 新しいことに触れられた 最高の7か月間

初めは、自分の住んでいる町から飛び出したい、自分の殻を破りたいという単純な思いで決めたカナダ留学。一瞬まばたきをしたら終わっていたというくらいあっという間でした。

少しでも多くのことを経験し、吸収しようと思って臨みました。毎日が新しいことの連続で、自分を縛っていた固定観念から日々解き放たれるような感覚でした。何よりこの留学は、自分の意思を持つことの大切さに気付かせてくれました。留学前と後で成長できたかと聞かれると、私は自信を持って成長できたと答えられます。

大好きなホストファミリーとルームメイト、そしてヴィクトリア大学の友達や先生とは、一生の思い出を作り、最高の異文化交流ができたと思います。すべてに感謝です。ありがとうございます。

文学部 現代社会学科 3年
藤原玲子



ビクトリアで出会った仲間たち(左から2番目)藤原さん

02 『家』を感じる場所

現地の人や留学生との交流は楽しく、その中でもホストファミリーとの日々は忘れられません。英語で互いを理解し合えた時の喜びは特別で、言葉の壁を越えて素晴らしい関係を築くことができました。食卓を囲んで大笑いしたことやクリスマスツリー選びに時間がかかったこと、日本語ででたらめな歌を作って遊んだことなど思い出は尽きません。「娘のように思っている」と伝えられた時には、嬉しさと離れ離れた寂しさで涙を抑えられませんでした。私がカナダでの日々を愛おしく感じるのには、違いも共通点も同じように受け入れ喜んでくれた素敵なホストファミリーに出会えたからです。

「いつでも帰っておいで」と言ってくれたホストファミリーに成長した姿を見せられるよう、今後も英語力を磨き続けていきたいです。

文学部 英語英文学科4年
法華あいり



ハロウィンのかぼちゃ選び

フランスの生徒と交流

Paris comes to NDSU

Students of Paul-Eluard high school in Paris, France experienced おもてなし from Seishin International Volunteers (SIV) during the students' stay in Okayama April 17th and 18th. The students, sponsored by French businesses and the French government, met the volunteers at お花見 in NDSU. That afternoon, the volunteers taught "Survival Japanese" which the French students used during an excursion in Okayama city to the Prefectural Assembly. The French students toured the Prefectural Assembly, met a representative, and exchanged 名刺 using their survival Japanese.

Thursday, the volunteers lead the French students through Benesse Art Site Naoshima. The volunteers provided Japanese language and cultural support during the day, as well as leadership during group presentations that evening in Japanese, English, and French.

Seishin International Volunteers showed they are capable, responsible, and effective communicators.



瀬戸内海・直島にて



学内でのお花見

スピーチコンテスト 優勝!

文学部 英語英文学科3年 藤井 麻也

I have learned so much since being a freshman, I could not speak English as well as my classmates. I decided to improve by speaking English every day.

Last year, I represented Notre Dame Seishin University in the 45th English Language Association Society Notre Dame Trophy Speech Contest. The other competitors came from The University of Tokyo, St Paul's University, Ryukoku University, Aoyama Gakuin University, Doshisha University, and Sophia University. I had never given an English speech before but I wanted to do my best. I practiced a lot with the support of my friends and professors.

Somehow I won. I also made friends with the other participants. Most important, I learned to focus, to try, and to enjoy. I could learn the importance of having the motivation to do one or two things for a long time.

I am proud of myself and grateful. Thank you, Seishin!



ようこそノートルダム
清心女子大学へ

本学と留学協定を結んでいる静宜大学(台湾)から1名、大連外国语大学(中国)から2名、計3名の留学生が来日しました。

清心国際ボランティア(SIV)学生のアドバイスにより、本学での留学生活も無事スタートしました。これから約1年間、本学学生とともに多くの事を学びます。



歓迎パーティーにて
(前列左から2番目)宋 秀珍さん、(3番目)張 晨暉さん
[中国]、(4番目)賴 敏綺さん[台湾]

SIVとは—

S=Seishin(清心)
I=International
V=Volunteer

本学(清心)の国際化・グローバル化に向けて、何ができるか、何から始めるか学生主体で考え、積極的に国際交流活動に取り組んでいます。

1 外国人留学生のための アドバイス

本学で受け入れている外国人留学生が、安心、安全で、なおかつ充実した留学生活を送るように適切なアドバイスとサポートをしています。

2 海外留学相談

本学の協定校へ留学経験のある学生が今後留学を目指す学生の相談に応じています。

3 国際交流イベント

外国籍の方、地域の方々も交えて国際交流イベントを企画実施し、親睦を深めています。

表紙の学生



左から、田中央央さん(英語英文3年)、林内美樹さん(現代社会3年)、藤井麻也さん、川端桃子さん(人間生活3年)
SIVに所属し、イベントの幹事をするなど積極的に国際交流活動に参加しています。

Interview with PROFESSOR

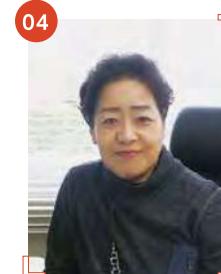
by SPARKLE

ノートルダム清心女子大学の個性豊かで楽しい先生や、おもしろい研究活動などを、学生広報スタッフ「SPARKLE」が紹介します。



03
上代文学を専門に研究されている東城敏毅先生は、新元号で話題となった『万葉集』の専門家です。令和の時代の学生へのメッセージを紹介します。

文学部 日本語日本文学科
東城 敏毅 教授



04
身体表現教育、体育科教育を専門とし、4年生に卒業間連行事の指導も行っている安江美保先生に、体育の道へ進まれたきっかけや手軽な運動法をうかがいました。
人間生活学部 児童学科
安江 美保 准教授

ロマンを求めて海外へ

私を一言で表すと、行動派です。自分の力を試したいと思い18歳の頃、船の片道切符を持って、一人中国で2か月間過ごしました。そこで、1年間一人旅をしている77歳のおじいさんや、中国の仏師になりたい日本人の高校生、初めて会った私を自宅に泊めてくれた人々など新しい出会いがありました。様々な考えに触れ視野が広がる経験があったからこそ、今の自分があると思います。大学では、モンゴル語の勉強をしていましたが、モンゴルと日本の神話を比較しているうちに、日本の魅力に気づき、日本文学の研究をするようになりました。

文学は面白い！

今、注目されている『万葉集』は古代と現代のつながりを感じられるものです。同じ古代に書かれた『古事記』の神話世界とは異なり、現場で実際に体験しながら詠まれた歌々です。学生には、実際に歌が詠まれた地を踏むことで、古代のロマンを感じてもらいたいです。例えば、ペルシャ人の顔を面白おかしく落書きしている木簡が発見されています。古代に確かに存在していた人物を少しでも身近に感じ、興味を持つことで、日常生活においても相手を思いやる力や心に寄り添う力、論理的な思考力が身につき、自分自身の成長にもつながります。

熱く生きよう、人生を楽しもう

これらの時代、学生には一歩踏み出し、様々なことに挑戦してもらいたいです。私は、最初はモンゴルで日本語を教えることを考えていましたが、海外の文化を知ることで、日本の文学の面白さに気づきました。旅行や留学、アルバイトなど、小さなことからでも始めて、夢中になれるを見つけて、充実した学生生活を送ってください。

[インタビュー]
人間生活学科 4年 梶尾 みのり
児童学科 4年 稲田 実里

体育の道を志した素敵なお会い

小学校3年生の担任の先生にバレーボールの練習に連れていかれ、上級生の中で活動するうちにスポーツで成長していくことにやりがいを見出しました。ただ、皆同じことをさせられる体育の授業は嫌いでした。でも大学の時に出会った恩師の先生は、一人ひとりに合った運動をしていくべきとおっしゃったので、そういう先生になりたいと思い体育を自分の専門として勉強してきました。小学校に勤めて22年、大学教員の職に進むかどうかを考えた時に、とても迷いましたが、自分の思いを学生につないでいくことも大切だと思い大学教員になりました。

誰でも気軽にできる運動をご紹介

年々、運動や体を動かすことに苦手意識を感じる学生が増えている印象です。1年生の体育実技Ⅰでは、はじめの3回に鬼ごっこやゲームを取り入れ、体を動かすことが楽しいと感じられるよう工夫しています。運動は生活のリズムが整うので、卒業後の長い人生を豊かに生きるために大切なことです。身体活動を1日1時間するのが理想と言われていますが、これには、家事や階段の上り下り、通学なども含まれます。例えば、暇な時につま先立ちや、かかと立ちを繰り返すだけでもあまり運動をしない現代人には効果がありますので、ぜひ心がけてください。

物事の本質を見抜く力

私が学生の皆さんに伝えたいことは、「いかに豊かに生きるか」ということです。周りに流されない力を学生時代につけてほしいと思っています。そのためには人との関わりを広げていったり、本を読んで深く思考する習慣をつけていったりすることが大切です。様々な物の見方や考え方を知り、物事の善しあしの判断と、本質を見抜くことができる人になってほしいです。

[インタビュー]
英語英文学科 3年 石川 留菜
日本語日本文学科 1年 藤本 朱夏

→ to be continued



第18回カトリック女子大学総合スポーツ競技大会

カトリック女子大学総合スポーツ競技大会は、同じ教育理念を根底に置く5つのカトリック女子大学が、スポーツを通して大学相互間の交流の輪を広げ、連携を深めることを願って毎年開催されているものです。

2018年12月15日(土)、16日(日)に第18回カトリック女子大学総合スポーツ競技大会が開催されました。

今回はノートルダム清心女子大学が開催校となり、聖心女子大学、清泉女子大学、白百合女子大学、京都ノートルダム女子大学を迎えて、寒い中、熱い戦いが繰り広げられました。

また、15日はヨゼフホールラウンジで懇親会を行いました。スポーツを通して競い合うだけではなく、互いに歓談し、大学間での交流を深めることができます。

16日には閉会式が行われ、山根道公副学長からトロフィー及び表彰状の授与が行われました。その後、本学の本保恭子学務部長から2019年開催校の京都ノートルダム女子大学 三好明夫学生部長へ大会旗が手渡されました。

今大会の結果

- 総合優勝 聖心女子大学
- 準優勝 ノートルダム清心女子大学
- 種別優勝
 - 硬式テニス:聖心女子大学
 - バスケットボール:ノートルダム清心女子大学
 - バドミントン:白百合女子大学
 - バレーボール:京都ノートルダム女子大学



片山裕之展 inノートルダム清心女子大学

2019年3月15日(金)～3月24日(日)に、本学ノートルダムホール本館100ND教室において、片山裕之展が開催されました。学内での作品発表は今回で5回目となり、新制作展と関西新制作展、岡山県展への出品作品(油彩F500号～F50号)を中心に約30点が展示されました。100ND教室での展示は初めてとなり、展示作品と歴史ある建物(国の登録有形文化財)が新たな空間をつくりだし、多くの方が訪れました。



吉金准教授が開発支援した商品が 金賞を受賞

食品栄養学科 吉金優准教授が、製造方法や品質管理などの助言を行った天然甘味料「マルクラのライスシロップ」(マルクラ食品:倉敷市)が、アジア最大級の食品・飲料展示会「FOODEX JAPAN2019」(2019年3月開催)「美食女子アワード(ママの愛部門)」で金賞を受賞しました。本取り組みは、岡山県備中県民局と(公財)岡山県産業振興財団から「全国に飛び出せ!備中地域ブランド応援事業」の委託を受けて実施したものです。この商品は、蜂蜜を食べられない乳児でも食べられることから、子どもに食べさせたい食品部門で受賞しました。

詳細は本学ホームページをご覧ください。本学では、産学連携センターを窓口として、地域企業の課題解決を積極的にお手伝いしています。

役職者の紹介



副学長(教学担当)
本保恭子
人間生活学部教授



副学長(経営担当)
山根道公
キリスト教文化研究所教授



大学院文学研究科長
日本語日本文学専攻主任
尾崎喜光
文学部教授



大学院人間生活学研究科長
人間複合科学専攻主任
食品栄養学専攻主任
林泰資
人間生活学部教授



英語英米文学専攻主任
坂口眞理
文学部教授



社会文化学専攻主任
紺谷亮一
文学部教授



人間発達学専攻主任
平松清志
人間生活学部教授



人間生活学専攻主任
小川賢一
人間生活学部教授



文学部長
山下美紀
文学部教授



人間生活学部長
片山裕之
人間生活学部教授



英語英文学科長
廣瀬佳司
文学部教授



日本語日本文学科長
山根知子
文学部教授



現代社会学科長
二階堂裕子
文学部教授



人間生活学科長
豊田尚吾
人間生活学部教授



児童学科長
赤木雅宣
人間生活学部教授



食品栄養学科長
戸田雅裕
人間生活学部教授

2019年度 新任の教職員 2019年4月1日付

教員		
人間生活学部 助手	食品栄養学科	辻本まさか
職員		
入試広報部 参与	中村茂喜	
食品栄養学科 実験実習助手	金谷幸佳	
施設企画管理部 部長	神原和也	
広報室 事務職員	井上万梨恵	

2018年度 新任の職員

職員		
キリスト教文化研究所 事務職員	古山聰子	2019年2月1日付
学長室付 参与	米澤慎二	2018年11月1日付
施設企画管理部 警備員	秋山雅洋	2018年7月8日付

2018年度 退職の職員 2018年12月31日付

職員		
キリスト教文化研究所 事務職員	三宅小百合	

2019年4月1日付



大学院文学研究科長
日本語日本文学専攻主任
尾崎喜光
文学部教授



大学院人間生活学研究科長
人間複合科学専攻主任
食品栄養学専攻主任
林泰資
人間生活学部教授



社会文化学専攻主任
紺谷亮一
文学部教授



人間発達学専攻主任
平松清志
人間生活学部教授



人間生活学部長
片山裕之
人間生活学部教授



英語英文学科長
廣瀬佳司
文学部教授



日本語日本文学科長
山根知子
文学部教授

2018年度 退職の教職員 2018年3月31日付

教員		
文学部 准教授	英語英文学科	中村善雄
文学部 准教授	日本語日本文学科	木下華子
文学部 教授	現代社会学科	藤實久美子
人間生活学部 教授	情報センター	水野 博
人間生活学部 助手	食品栄養学科	脇田 和
客員教授	地域連携センター	木山博雅

職員

施設企画管理部 部長	長畠健一
附属図書館 事務部長	大塚雅嗣
地域連携センター 事務次長	樋口京子
入試広報部 参与	仲上 健
学務部諸課程 事務職員	文箭桃子
食品栄養学科 実験実習助手	赤澤美帆

ノートルダム清心女子大学教育基金(一粒の麦)へのご協力お礼

2018年12月より本学の設立母体である、ナミュール・ノートルダム修道女会設立の精神に基づき、「ノートルダム清心女子大学教育基金(一粒の麦)」が設立されました。本基金には多くの皆様のご賛同・ご協力をいただき、2019年3月末までに3,648,000円のご厚意をいただくことが出来ました。この資金は教育研究活動の拡充や本学学生に給付する学資の一部にあたられ、学生の国際交流や大学のグローバル化のためにも利用させていただく予定としております。

ご協力いただきました皆様に心から御礼申し上げますとともに、今後とも変わらぬご支援を賜りますようお願い申し上げます。

学長 原田 豊己

●寄付金集計表

使途名	寄付額	件数
学術研究・教育活動の奨励または支援	¥1,120,000	18
教育研究環境の拡充	¥145,000	10
本学学生に給付する学資	¥309,000	14
国際交流・グローバル化	¥72,000	4
目的は問わない	¥2,002,000	91
合計	¥3,648,000	137

アンケートのお礼

昨年末に、学報と同封でお願いいたしました卒業生アンケートにつきましては、1,271名という多くの皆様にご回答いただきました。お忙しい中、貴重なお時間を頂戴し、関係者一同心より御礼申し上げます。

これから、ノートルダム清心女子大学が教育機関として果してきた役割を検証・評価するとともに、今後の本学のあり方やより良い教育支援体制について、具体的に検討してまいります。アンケートの分析結果は、学報でも報告させていただく予定です。

また、皆様の個人情報につきましては、同窓会事務局のご協力のもと、厳重に管理しておりますことも併せてご報告いたします。今後とも、変わらぬご支援・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

卒業生アンケート実施ワーキンググループ
グループ長 山根 道公

2019年度学内暦(6月~10月)

6/1	火曜日の授業振替	9/9~13	9月集中講義日(通年科目補講日)
7/15	月曜日の通常授業(海の日)	9/16	敬老の日
7/20	休講日が生じた時の代替授業日	9/18	大学院入学試験(秋季)
7/22~27	第1期定期試験・授業日	9/23	秋分の日
7/29~31	第1期定期試験・授業日	9/24	第2期授業開始
8/1~2	第1期定期試験・授業日	9/27	秋季卒業証書・学位記授与式
8/3~9/23	夏季休暇		[秋季大学院学位記授与式]
8/5	第1期定期試験予備日・補講日	9/28	教育懇談会
8/10~18	学内施設閉鎖期間	10/12	月曜日の授業振替
8/11	山の日	10/14	体育の日
8/12	振替休日	10/19	スポーツデー
8/28~30	追試験・第1期定期試験予備日	10/22	即位礼正殿の儀
9/2~6	9月集中講義日(通年科目補講日)		

第56回 大学祭テーマ「Link ~つながるオモイ つなげるジダイ~」

[大学祭日程] 2019年11月3日(日・祝)・4日(月・振休)

テーマには、平成から令和に時代は変わったが、平成からの想いは令和の時代にも繋げていくことが大切であるという気持ちが込められています。今年は大学創立70周年の年であります。昨年以上に盛り上がる大学祭になるよう、実行委員一同頑張ってまいりたいと思っております。大学祭にぜひご来場ください。

大学祭実行委員一同



編集後記

3月で本学を卒業していく皆様ご卒業おめでとうございます。新入生の皆様ご入学おめでとうございます。今号は、本学の伝統的な卒業関連行事と入学宣誓式の様子をお伝えしました。そして、地域活動や国際交流活動を通して、在学生の活発で生き生きとした姿を紹介しました。制作について、在学生、卒業生の皆様に快くご協力いただきましたこと感謝いたします。

(広報室)

聖書の言葉



命のある限り
恵みと慈しみはいつもわたしを追う
主の家にわたしは帰り
生涯、そこにとどまるであろう。

詩編23章6節

4月14日、パリのノートルダム大聖堂は大きな火災に見舞われた。フランス各地の大聖堂は「ノートルダム（聖母マリア）」に捧げられ、パリのノートルダム大聖堂は石の色が白いことから「白い貴婦人」と呼ばれ、多く人々の精神的な支柱である。詩人シャルル・ペギーは「限りなく高貴で、物腰は柔らかく、限りなく母性をたたえている」と大聖堂をたたえた。

大聖堂は神と人々を結ぶ場であり、その空間は神聖さと気高さに満ち、そこでは日夜祈りが捧げられている。「主の家」

である大聖堂は、私たち一人ひとりの中にもある。中世の人々が800年もの歳月をかけて築いたノートルダム大聖堂が元の形を取り戻すことはなくとも、生涯とどまる「主の家」は、私たちの永遠のふるさとのである。

キリスト教文化研究所長 須沢かおり

Mini Serialization

Seishin Archives

今に続く清心の歴史をご紹介

聖ジュリー・ビリアートの列聖50周年



2019年は、ノートルダム清心学園の設立母体であるナミュール・ノートルダム修道女会の創立者聖ジュリー・ビリアートの列聖から、ちょうど50周年を迎えます。列聖とは聖人の列に列せられることで、聖ジュリーは1969年6月22日、ローマ教皇パウロ6世により列聖されました。1969年7月10日に発行された「カトリック教育」には「聖女は過去、将来をおもいめぐらしながら、現在の瞬間の価値を実感し、会の使徒職に教育をえらび、加えて「学生たちが生涯必要とすること」を教えるという鉄則指針を打ち出した。」と書かれています。

聖ジュリーが示した指針は、修道会のシスター、教職員に受け継がれ、現在も本学の教育理念に明確に記されています。

聖人とは、神の恩恵を豊かに受け、キリスト者として、優れた生き方と死に方をし、教会によって崇敬に値する者と判断された人びとのことです(『新カトリック大事典』)。

ノートルダムの風景 アンジェラスの鐘



アンジェラスの鐘をご存知でしょうか。ノートルダムホール東棟の聖堂の鐘楼にある鐘のことです。1日3回唱えられる「お告げの祈り」の時刻(朝6時、正午12時、夕方6時)を知らせるために鳴らされます。鐘の音を聞くことで、受胎告知一天使がマリアに現れ、神の恵みが与えられ身ごもって男の子(イエス)を産み、その子イエスは聖なるもの神の子と呼ばれる一から始まるイエス・キリストの生涯を思い起します。そのため「お告げの鐘」または「天使(アンジェラス)の鐘」と呼ばれます。

最近、鐘の鳴らし方が変わったことにお気づきの方もいらっしゃるでしょう。復活節の間は打鐘の回数と間隔が変わります。今年の復活祭は4月21日でしたので、当日の朝の鐘から変わっています。聖靈降臨の主日(6月9日)の翌日からはもとに戻ります。わたしたちの大学は今年創立70周年を、ノートルダムホール本館と東棟は竣工90周年を迎えています。アンジェラスの鐘は、毎日、私たちに、私たち一人ひとりがかけがえのない存在としていつも神様が傍らにいて大切にしてくださることを祈りの中で伝えてくれています。



Cover : 文学部 英語英文学科 3年 藤井 麻也

2018年度大学祭スピーチコンテストにて優勝(E.L.A.S.主催)。清心国際ボランティア(SIV)に所属し、5月に来日したナミュール・ノートルダム修道女会シスターのアテンドをつとめるなど様々な場面で活躍。(表紙はSIVのメンバーとともに。P10にてSIVの活動を紹介)

ノートルダム清心女子大学 BULLETIN Vol.202

発行 ノートルダム清心女子大学 広報室

2019年5月31日

〒700-8516 岡山市北区伊福町2-16-9
TEL(086)252-3107 <https://www.ndsu.ac.jp/>